

令和元年度

研究のまとめ

全体研究テーマ

社会に開かれた教育課程の検討（2年次）

～基本的な考え方の整理と指導内容等の検討を通して～



令和2年3月

長崎県立佐世保特別支援学校

目次

はじめに

- 第1章 研究について 1~8
- 第2章 あたご部門小学部の研究 9~30
- 第3章 あたご部門中学部の研究 31~42
- 第4章 あたご部門高等部の研究 43~47
- 第5章 わかくす部門小学部
Ⅲ課程の研究 48~65
- 第6章 わかくす部門中学部・高等部
Ⅲ課程の研究 66~77
- 第7章 わかくす部門小学部・中学部
高等部Ⅳ課程の研究 78~97
- 第8章 北松分教室の研究 98~101
- 第9章 上五島分教室の研究 102~107
- おわりに

はじめに

授業づくりに悪戦苦闘していたころ、井上弘氏の「よい授業の条件 (1974)」という本に出会いました。たまさか抜き書きしていたので紹介してみます。

『指導案どおりにすらすらと授業が流れ、教師の発問などに子どもは活発に応え、目を見張るような教材教具が並んでいます。ビデオやコンピュータなどの教育機器が使用され、子どもは、興味をもってどんどん取り組んでいるように見えます。子どもは、楽しそうに授業に参加しているのは事実で、このような授業は、経験の浅い教師にとっては、「うまい授業」に見えるかもしれません。

しかし、その授業で、「子どもが、何を体験し身に付けようとしているのか」が不明確であれば、「よい授業」とは言えません。子どもと教師の真剣なぶつかり合いや、葛藤場面、できるまで何度もトライする場面などが見られない授業、また、自分の課題を理解せずに安直な楽しさだけに身を任せて活動する授業。等々。「うまい授業」を目指せば、「よい授業」から離れていく危険性があるようです。逆に、「よい授業」を志向していけば、未熟ではあっても、授業は「よい授業」へと近付いていきます。また、「よい授業」を目指して実践を重ねていけば、結果的に「うまい授業」にも近付いていきます。』昭和49年の文献ですが、私たちが忘れてはならない不易の原理原則を提言しています。

特別支援学校の授業づくりはよく山登りに似ていると思います。山の頂（授業の目標）を目指し、教師は、子どもたちと共に登頂成功を誓って登り始めます。ときには子どもたちの先頭に立って手を引きます。またあるときは一番後から粘り強く激励をし、背中を押し上げます。頂に至る山道は一本ではなく、この子にはちょっと距離はあるが勾配の緩やかなこのコースを、いやこの子には敢えて岩だらけの急勾配のコースを登らせよう。頂に近づくにつれ、子どもたちには、それぞれに必要な苦労をもうすぐ乗り越えるという歓喜が湧き、その心地よさが頂上での弁当の味を何倍にもうまくします。教師は汗みずくになりながら共に登り切ったからこそ子どもたちの努力が痛いほどに分かり、心の底から湧き上がる称賛の言葉を叫ばずにはいられません。頂上からの景色は、やり遂げた誇りと自身への信頼と仲間がいれば一体感で、教師にも子らにも燦然と輝いて見えるでしょう。

さて、今次の研究は、カリキュラム・マネジメントの好循環を産み出すための仕組みづくりと実践による検証です。まさに学校ぐるみで「よりよい授業づくり」を目指す取組です。まだ、道半ばですので、いろいろ苦労も多いのですが、学習指導要領が改訂され、為すべきことが明確になりました。本時より次時。今日より明日。私たち教師は、いつの時代も日々「よりよい授業」を求めています。そのための努力は惜しんではならないし、そのためにこそ時間を割かねばなりません。教師として生きるのであれば、授業計画の立案や教材研究の「苦しさもまた愉し」です。例え頂に至る一步手前で本時が終わろうとも、「よりよい授業」を志向し続けていけば、涼風に頬をなでられながら、子らと共に握り飯をほおぼる、そのうまさ待っているはず。この「よりよい授業」を創造する喜びこそ、教師の冥利ではないでしょうか。教育行政や県立高等学校長、諫早図書館長などを歴任された小値賀町出身の平田徳男先生がこう仰っています。「ロープウエーで来た人は、登山家と同じ太陽を見ることはできない。」

今次の研究で私たちは「単元別指導計画表」を創出しました。この計画表によって、授業改善（カリ・マネ）の好循環を、何とかして普通の教師文化・学校文化に馴染ませたいとの思いです。ご一読の上、ご指導ご助言を賜りますれば幸いです。

佐世保特別支援学校長 西岡哲男

第1章 研究について

社会に開かれた教育課程の検討

～基本的な考え方の整理と指導内容の検討を通して～

1 全体研究テーマ

「社会に開かれた教育課程」の検討

～基本的な考え方に基づいた指導内容等の整理と、『単元別指導計画表』を活用した授業づくり～（2年次）

2 研究テーマ設定の理由

(1) これまでの研究について

先行研究では、本校児童生徒の目指す姿と、その姿に近付くために必要な「育てたい力・身に付けてほしい力」の検討をしてきた。さらに小学部、中学部、高等部の各部段階で「何を学ぶか・どのように学ぶか・何ができるようになるか」を明確にし、小学部、中学部、高等部と一貫性、系統性のある指導を行うことを目的としていた。

○「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表（平成21～24年度研究）

【あたご部門（知的障害教育部門）】高等部卒業後に必要な育みたい力を教員の話し合いの基に集約し、「一般就労」「福祉的就労」「生活介護」に分類し、研究企画会において、教育支援部、進路指導部においてわかす部門のⅢ課程で作成されていた「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表を基に作成した。（小学部・中学部、高等部の2枚構成）【資料1～2参照】

【わかす部門（肢体不自由教育部門）】高等部卒業後に目指す姿を本校の「目指す児童生徒像」から各類型で設定した。その姿に近付くために必要な力を教員・保護者・児童生徒それぞれの立場からアンケートを集約し、各部経営目標の6項目で分類し、小中高の各部段階に振り分けた。また、平成28年度から平成29年度研究において、先行研究の内容の見直しや卒業後に利用する関係機関の聞き取り等を踏まえ再整理した。また、名称を「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表とした。（Ⅰ・Ⅱ課程、Ⅲ課程、Ⅳ課程の3枚構成）【資料3～5参照】

※Ⅰ課程（準ずる教育課程）・Ⅱ課程（下学年・下学部代替の教育課程）、Ⅲ課程（知的障害者を教育する特別支援学校の各教科に替えた教育課程）、Ⅳ課程（自立活動を主とする教育課程）

(2) 本校における課題

授業において扱うべき内容については、教育課程表の年間指導計画に記載されているが、単元や題材をどのような構成で授業として行っていくのが明確でなかったり、授業内容の検討が学年や各部内で十分に行われていなかったりした。また、授業の反省が次年度の授業に十分生かされておらず、PDCAサイクルの授業改善が十分に行われているとは言えず、年間指導計画や次年度の授業改善に反映するまでは十分できていなかった。特に「何を指導すべきか」「どのように指導すべきなのか」が不明瞭な状況にあり、このことが本校の課題であった。

(3) 学習指導要領改訂から

学習指導要領の改訂に伴い、教育課程編成において、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有することが求められる。そのため、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」の実現が重要となることを示した。

(4) カリキュラム・マネジメントについて ～教育課程の実施と学習評価～

教育課程はあらゆる教育活動を支える基盤となるものである。教育課程に基づく教育活動をより効果的に実施していく観点から運営する必要がある。新学習指導要領等においてカリキュラム・マネジメントとは、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと」と定義している。

教育課程の実施と学習評価に関する具体的なカリキュラム・マネジメントの視点としては、各教科等の指導に当たって①「知識及び技能」が習得されるようにすること、②「思考力、判断力、表現力等」を育成すること、③「学びに向かう力、人間性等」を涵養することが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、その際、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが求められる。

(5) 佐世保特別支援学校の「社会に開かれた教育課程」について

今年度のカリキュラム・マネジメント推進委員会において、学校長の方針の下、佐世保特別支援学校の「社会に開かれた教育課程」の捉えを明確にした。

① 「よりよい（共生）社会（創り）につながる教育課程」

⇒社会と学校が目標を共有できる

＜誰もが暮らしやすく、自分の役割を果たす喜びが実感できる社会創りに貢献する教育課程＞

社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標をもち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことが重要。

② 「豊かな人生（創り）につながる教育課程」

⇒社会（世界）に向き合い人生を切り拓くための資質・能力を育む教育課程

＜社会に向き合い自分らしい豊かな人生を送るための資質・能力を育成する教育課程＞

これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくことが重要。

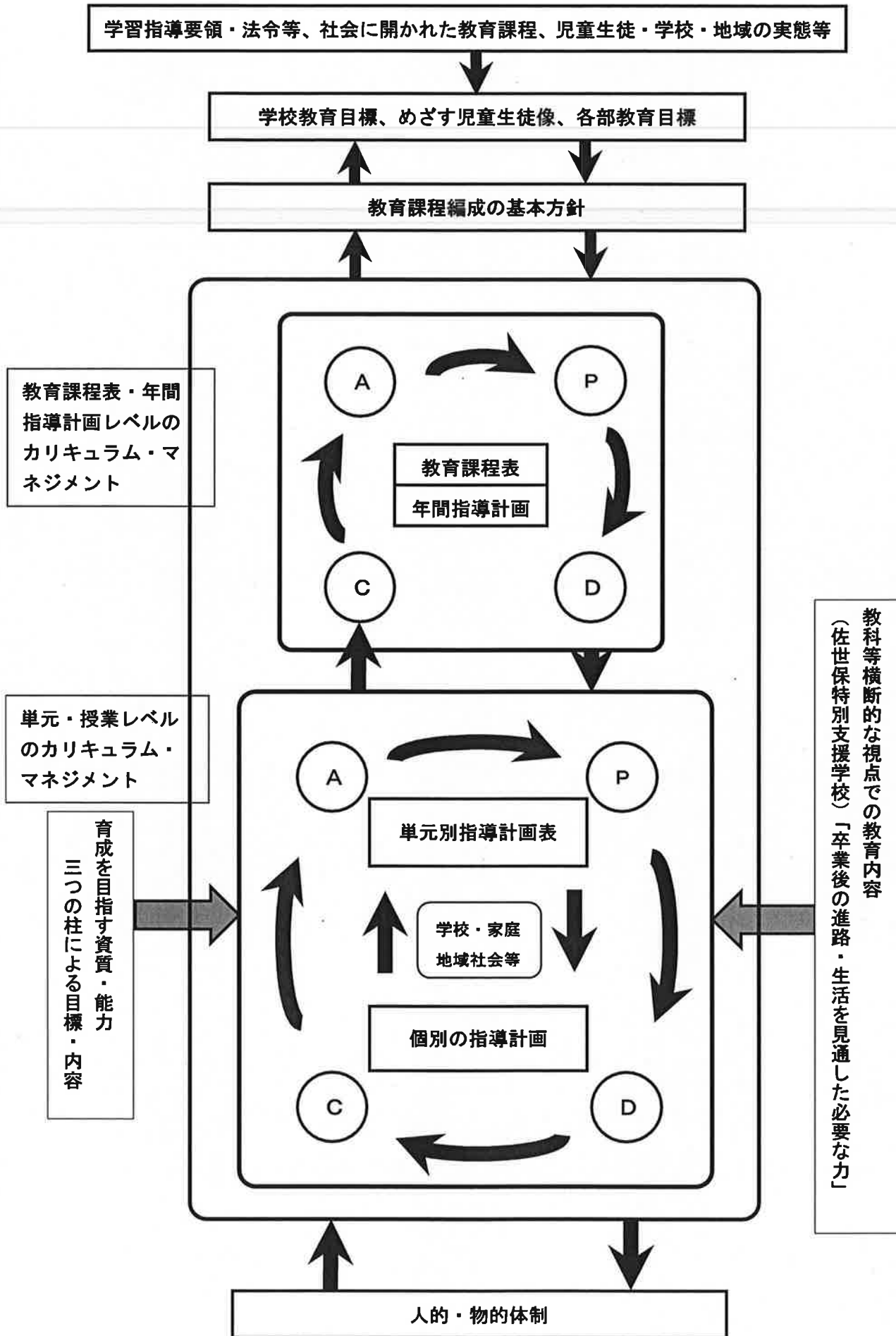
③ （今と未来の）地域社会につながる教育課程

⇒地域社会（人的・物的資源等）との連携により学校教育の目標実現を目指す教育課程

＜社会とつながる教育課程（社会と直接的・間接的につながりながら上記①②を実現する教育課程）＞

教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが重要である。

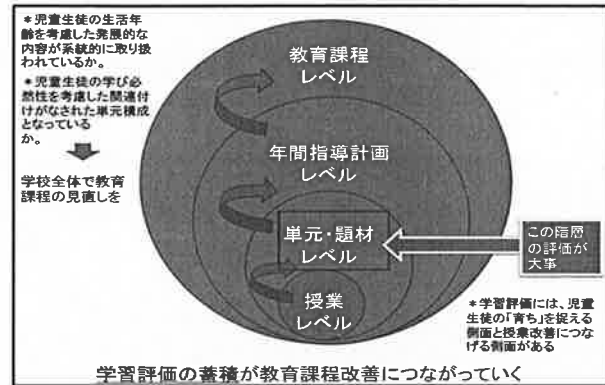
佐世保特別支援学校のカリキュラム・マネジメント（概念図 Ver. 2）



(6) 単元・題材レベルの評価の重要性

昨年度の講師招聘研修会では、植草学園大学菊地一文准教授を招いて「新学習指導要領とキャリア教育」というテーマで講義を受けた。菊池准教授からは「単元別指導計画表」について、次の2点の評価を得た。

- 「単元別指導計画表」は「育成すべき資質・能力」の三つの柱や本校の「育てたい力」（卒業後の進路・生活を見通した必要な力）という教科等横断的な視点で整理され、授業づくりをする際の良いツールになる。
- 【図1】の資料に示すとおり単元・題材レベルにおける学習評価の蓄積が授業改善や教育課程編成に大きくつながっていくことから、「単元別指導計画表」を生かした授業改善は非常に有効であるという評価を得た。



【図1】講師招聘研修会資料（菊地）

(7) 研究テーマについて

学習指導要領に示された「社会に開かれた教育課程」を実現していくためには、特別支援学校学習指導要領の知的教科の教育内容に示された「育成を目指す資質・能力」の三つの柱を踏まえた目標や評価規準を設定し、指導内容等を整理する必要がある。また、単元・題材レベルの学習評価を蓄積し、授業内容を検討したり、授業を改善したりすることが、教育課程全体の改善につながり、本校の「社会に開かれた教育課程」編成につながっていくと考え、本テーマを設定した。

3 研究の目的

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、本校の基本的な考え方を明確にし、「育成すべき資質・能力」を身に付けさせるための指導内容等を整備する。

4 研究の内容と方法

(1) 1年次は、「社会に開かれた教育課程」の編成に向け、以下の4点について研究を行った。

- ①各指導形態の単元（題材）ごとに含まれる各教科等の指導内容を学習指導要領の「育成を目指す資質・能力」の三つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）で整理し、本校の「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」を踏まえた「単元別指導計画表」を作成する。
- ②児童生徒の実態や、児童生徒本人・保護者・地域住民の意向、卒業生の進路先や福祉事業所等からの要望（学校時代に「育成してほしい力」等）などについて把握（学校評価の結果の反映・必要に応じてアンケート調査等を実施）し、本校における「育てたい力・身に付けてほしい力」を作成する。
- ③学習指導要領総則に係る自主・校内研修や「新学習指導要領とキャリア教育」に係る講師招聘研修会を実施する。
- ④「社会に開かれた教育課程」に関する先進校視察による情報収集と報告会を実施する。

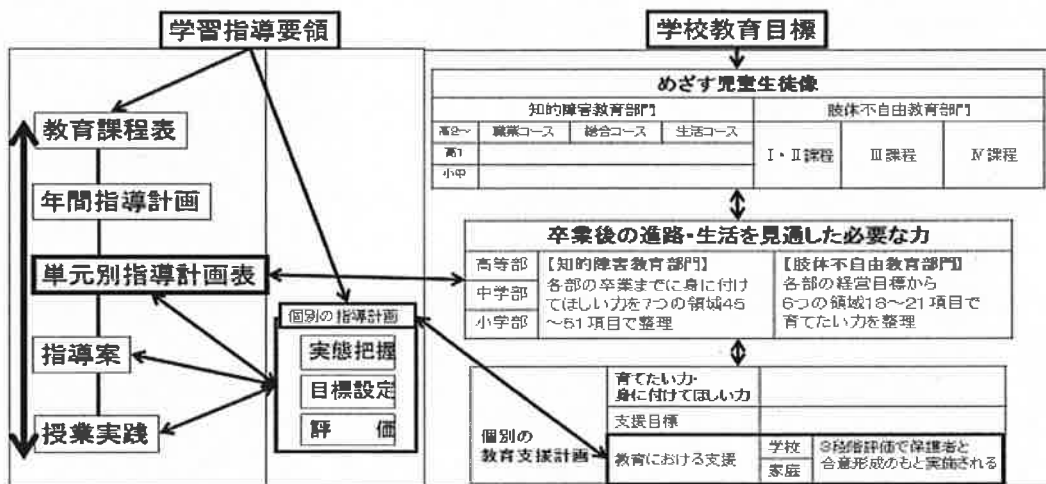
(2) 2年次では、「育成すべき資質・能力」の三つの柱や本校の「育てたい力」を踏まえた目標や学習内容の設定、評価規準の在り方の検討（「単元別指導計画表」の再考）及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくりを研究した。

- ① 国語科・算数科（数学科）、生活単元学習（肢体不自由教育部門）を中心に単元別指導計画

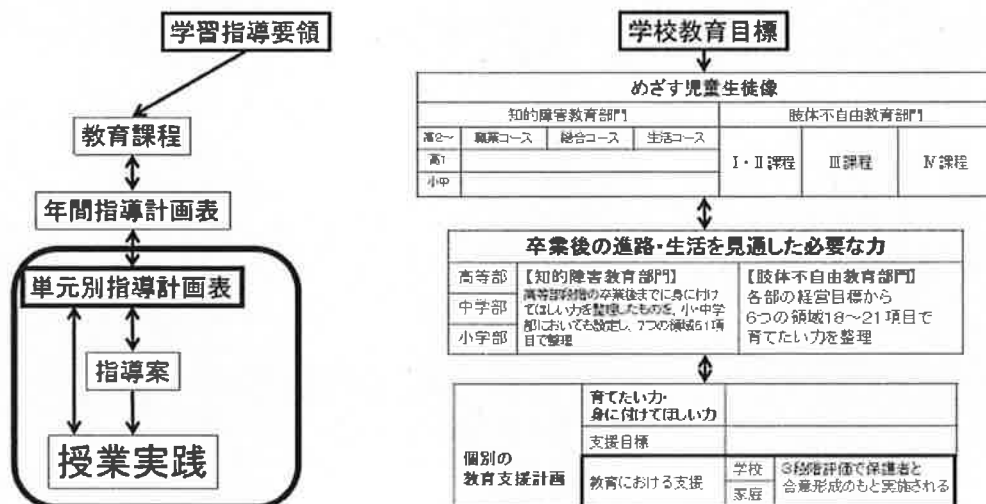
- 表を作成する。
- ② 単元の目標設定では、『育成を目指す資質・能力の三つの柱』を新学習指導要領の指導すべき内容一覧表のどこに基づいているか記述することで、『新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実』を明確に記す。
 - ③ 単元別指導計画表を活用した授業を実践することで、授業計画や次年度に向けた授業の評価（振り返り）のツールとして活用する。
 - ④ 単元別指導計画表を作成しながら、研究授業・授業研究会を実施する。
 - ⑤ 「単元別指導計画表の作成マニュアル」を作成する。
 - ⑥ 卒業後に目指す姿・卒業後の進路・生活を見通した必要な力』（教育支援部・進路指導部）を単元別指導計画表に記入した上で作成する。
 - ⑦ 知的障害教育部門高等部においては、部の指導内容一覧表に基づき、高等部の指導内容表の作成を行い、コース制実施に伴う年間指導計画の再検討・見直しを行う。
- (3) 3年次では、全ての教科・生活単元学習等の「単元別指導計画表」を作成する予定である。単元別指導計画表の授業反省を反映させた小学部、中学部、高等部の系統性のある年間指導計画の再編成と「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善について研究する。
- 本研究は、本校知的障害教育部門小学部、中学部、肢体不自由教育部門小学部、中学部、高等部、本校知的障害教育部門高等部、北松分教室、上五島分教室で適宜、連携、協力しながら進める。

【図2】は、平成30年度からの3年間の研究の内容を図示したものである。

【図3】は平成30年度～令和元年度の研究の取組である。太線部が今年度の2年次の研究の取組みを示したものである。



【図2】本校の「育てたい力」と個別目標設定と授業との接合の関連図



【図3】2年次の研究の取組（枠内）

5 研究の経過（2年次）

月	研究会
4月	○昨年度の研究、今年度の研究について、全体研究の概要説明 ○単元別指導計画表の説明、各部・各部門において協議
5月	○各部・各部門で国語科・算数科（数学科）を中心に単元別指導計画表を作成
6月	○単元別指導計画表に基づく公開授業・授業研究会を実施する ○12月までに各部門・各部別で研究授業を実施
7月～1月	○講師招聘研修会 テーマ：「特別支援学校における「主体的・対話的で、深い学び」について」 期 日：11月25日（月）本校プレイルーム 講 師：長崎県教育センター教育支援研修課 特別支援教育研修班 係長 伊藤公裕先生 指導主事 山田政博先生 ○単元別指導計画表マニュアル検討・作成（1月）
2月～3月	研究のまとめ製本・配付 出張報告会（単元別指導計画表マニュアル説明）

研究会は月2回設定し、1月まで実施した。

6 2年次の研究成果と3年次に向けた課題

本研究は、新学習指導要領に基づき「社会に開かれた教育課程」を実現するため、単元別指導計画表の作成を行った。2年次の研究成果として挙げられることと課題について、以下にまとめる。

（1）単元別指導計画表について

各部門・各部で、国語科・算数科（数学科）・生活単元学習（肢体不自由教育部門Ⅳ課程）の単元別指導計画表の作成を行った。成果として単元別指導計画表を作成していくことは、授業改善や個別の指導計画、年間指導計画、教育課程の改善に生かすツールとなり、単元・授業レベルにおけるカリキュラム・マネジメントの確立につながった。また、単元別指導計画表に基づく研究授業を行い、「育成を目指す、資質・能力の三つの柱」について検証することができた。

○単元別指導計画表を作成する意図・目的について（単元別指導計画表マニュアルから）

新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」の実施及び実現を目指して、指導内容を整理し「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れて授業改善を継続させ、育成を目指す資質・能力を着実に身に付けさせるため、単元別指導計画表を作成する。

単元別指導計画表を作成・運用することは、教育活動の質を向上させる授業改善の好循環を生み、維持させることにつながり、カリキュラム・マネジメントを行う上で重要な役割がある。カリキュラム・マネジメントの視点としては、各教科等の指導に当たっては、①「知識及び技能が習得されるようにすること」、②「思考力、判断力、表現力等を育成すること」、③「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の三つが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、その際、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが求められる。単元別指導計画表を作成・運用していくことは、授業改善や個別の指導計画、年間指導計画に反映するため、まさにカリキュラム・マネジメントであると言える。

※単元別指導計画表を作成することで、次年度に向けた授業改善、年間指導計画の改善につながる。また、個別の指導計画等、教育課程全体にも改善は波及し、教育活動の質を向上させる好循環を生み出す。結果的に教育課程全体の改善につながる。（＝カリキュラム・マネジメント）

(2) 単元別指導計画表マニュアル作成について

単元別指導計画表のマニュアル作成においては、併せて様式の再検討も行った。単元目標では「育成を目指す、資質・能力の三つの柱」を基に設定することで、単元や題材の学習内容や学習活動を検討しながら、児童生徒の「主体的・対話的で、深い学び」の実現に向けた授業改善を行うようにした。また、「見方・考え方」を記入する項目を設定することで、各教科の見方・考え方を児童生徒が働かせ、深い学びが実現（授業改善）するよう授業を行う意図を明確に示すことができるようにした。

単元評価については評価規準を示し、単元における児童生徒の目指す姿を記しておく。授業の反省については、項目名を「次年度に向けて」という書き方に変更。改善点があるか分かりやすく示すため、「◎○△」で評価するようにした。そして、「見方・考え方」「育てたい力」の項目を新たに設定し、単元や授業でどのように効果があったのか記述するようにした。

(3) 講師招聘研修会について

講師招聘研修会では、長崎県教育センター教育支援研修課、特別支援教育研修班の伊藤公裕係長、山田政博指導主事を招いて「特別支援学校における『主体的・対話的で深い学び』について」というテーマで講義を受けた。新学習指導要領の主体的な学び、対話的な学び、深い学びの三つの視点と、単元、題材等、授業のまとまりを見通した授業改善について具体例を挙げて説明があった。また、長崎県教育センターが考案した「単元構想シート」を活用した「主体的・対話的で、深い学び」を視点とした授業改善の具体例が示され、以下の4点を基に単元を構想するとよいことが分かった。①単元において、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力は「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の何か明確にすること。②単元において、児童生徒が働かせる「見方・考え方」を明確にすること。③児童生徒が「見方・考え方」を働かせるために、必要な「問い（発問）」を明確にすること。④「単元構成」において、「深い学び」の実現に向けさせるために仕組む「主体的な学び」「対話的な学び」を明確にすること。実際に単元と題材を構想し、単元別指導計画表を作成する上で、非常に参考になる研修であった。

(4) 「単元別指導計画表」の現状と課題

単元別指導計画表の作成について、良い点・課題及び改善点等をアンケートを実施して成果を明らかにした。

良い点

- 新学習指導要領の育成すべき三つの柱に沿って授業を展開できる
- 指導内容や目標の明確化、単元・学習内容が整理されてよい
(児童・生徒への学習のねらいが明確になり、授業での目指す姿が具体的になった)
- 教員間で、目標・評価の共有につながり、連携しやすい
- 授業後の反省を基に、授業・年間指導計画などの改善に生かせる
- 指導者が変わっても、単元のねらいがぶれにくい

課題及び改善点

- 育成すべき資質・能力の三つの柱に基づく目標設定、単元評価の在り方
- 深い学びにつながるための「見方・考え方」を視点に取り入れた授業構想
- 本校の育てたい力をどのように授業に反映し、評価するのか（活用の仕方）
- 個別の指導計画、年間指導計画（教育課程）に反映する活用の仕方
- 継続して活用されるための工夫

上記のように様々な意見が見られた。

①良い点については単元別指導計画表を使うと単元や題材の指導計画・学習活動が明確になり、単元全体を見通すことができる。また、新学習指導要領の三つの柱に基づいた目標・評価の設定ができ、「何を学ばせたいか」学習のねらいが明確になり、学習上の目指す児童生徒の姿が具体的に変わった。単元別指導計画表は、教員間で授業の目標や手立て等を共有することができ、教員間の連携ツールになるという意見が多かった。

②課題及び改善点としては、児童生徒の実態差が大きいグループの場合、授業や評価がしにくいという意見があった。単元別指導計画表はあくまでも授業を行っていく上での目標や評価を計画しているため、個別の手立てや留意点などについては、個別の指導計画を活用し関連させることが必要である。また、新学習指導要領の三つの柱に基づいた目標・評価の設定の難しさを感じる先生方が多く、特に「学びに向かう力・人間性の涵養」の目標設定が難しいという声が多かった。今後も新学習指導要領の勉強会・研修会を継続して行ったり、単元別指導計画表を具体的にどのように作成していくかをマニュアルに基づき確認したりする必要がある。「見方・考え方」については次年度、様式を改訂し、授業の意図やねらいが明確に分かるように記入する項目を設定する。

アンケートの中では、作成することへの負担感を感じていることが分かった。確かに新たに単元別指導計画表を作成していくのは負担であるが、最初に年間を通した内容を作成しておけば、次年度からはシートを修正するだけでよくなり、かなり負担が軽減されると思われる。また、単元別指導計画表があることで、昨年度の授業を参考にしながら改善することができ、単元計画、学習活動等、教員の見直しにもつながり、良い授業につながることで、児童・生徒にも望ましい影響があると思われるので、継続して作り続けていくことで負担が軽減されるのではないかと考える。そのためにも、単元別指導計画表の意義・必要性を、全教員が共有することが大切である。教育課程では単元レベルでの目標設定や評価が最も重要であることや、単元別指導計画表がカリキュラム・マネジメントの重要な柱であることを繰り返し伝えていくことが必要であると思う。次年度は国語科・算数科・数学科以外の各教科で作成を行っていくことで、教育課程の改善（カリキュラム・マネジメント）につなげていきたい。

<参考文献>

- ・長崎県立佐世保特別支援学校（2018）：平成30年度 研究のまとめ
- ・分藤賢之（2017）：「特別支援教育の観点を踏まえたカリキュラム・マネジメント」特別支援教育 68号 東洋館出版社